

花袋氏を見舞ふ

徳田秋声

…二…

日本の新聞紙は、外国の文学者や音楽家や映画俳優などの病氣や死については、割合敏感だが、日本の文豪の生死問題などについては、割合に鈍感であるのはおかしい。もっともブルジョア（ブルジョアは私では俗衆の意味だが）趣味に墮する事を、寧ろ民衆的大衆的として気受けのいい時節なので、好尚の低下が、それ自身何か人間生活の社会化であるかのように思われている。今の新しい文学には、私はどっちかという、人一倍敬服している方だが、社会性があるかどうかということになると疑わしい。社会問題を取扱ったもの、触れたものは沢山あるに違いないが、大抵は文壇だけでの社会性、詰まり文壇の階級闘争の意味にしか受取れないものが多い。私は田山氏の作品に、現代のいわゆる社会性があるとは断言しないが、力作「残雪」などの中に、人道的な社会苦人間苦の深くにじみ出ているものあることを感じずには居られない。完全に、唯物史観によって科学化されない、あるいはフォエルバッハあたりの哲文学からでも出て来なければならぬような自然主義的な物の見方が、今日で

も別に古いものだとは思えない。「残雪」はもちろん氏の熱情に走らせた当初の自然主義芸術に対して、多少の修正を提出したものと見るのが至当だろうと思うが、寧ろ理想家としての氏の姿を仰ぐべきものだろうから。トルストイズムの多量に含まれているのも不思議ではない。人生、社会に対する氏の純白な熱意と、詩人的な詠嘆とが、寧ろ人として弱き人、生一本気な人田山花袋氏を時々感傷癖に追いこんではいるが、そこに氏の敬けんな宗教的苦悶のあえぎが見られる。氏は純芸術家であるだけに直接社会問題などには触れていけないけれど、文壇人としては珍しい正義家であり、革命家であることが、「残雪」のなかでしばしば出くわす氏の姿であり、生息^{せいふき}である。それは兎に角として、氏ほど大胆に所信に向ってまい進した人は、今までの文壇にその類例がない。自然主義を提唱して、偶像破壊の大鉄^{てつ}ついを振るった頃の氏には、たしかに宗教家の感激と革命家の熱意があった。氏は少なくとも過去においては日本の思想界に画期的な大仕事をなし遂げて来た人である。過去の人だという意味ではない。近來家庭の出来事や、氏自身の健康のために、余り目立った創作上の所産はないにしても、氏の芸術的生活が今において停頓しているものかなんぞのように思うのは、軽率であ

り気短である。氏を見舞ったとき、私も大きな仕事をされることを望んだし、氏も病気にさえかからなければ、飛躍を試むべき計画もあるかに話された。日本の文壇では若い人を無暗と急ぎ立てることはするが、芸術家を有効に生かすことについては、案外不用意である。芸術家自身が有効に生きなければならぬのはもちろんだが、氏のように対社会的なことには余り頭脳を働かすことを潔しとしない人格の持ち主に対しては、過去の業績に対してだけでも、今少し□□性でないことを望まざるを得ない。どうせ田山氏などは日本の文壇史上に大きな痕跡を止める人だろうから、その人のことは、矢張りもっと詳しく報道されても好い訳だし、後の人が跡を探るのに骨が折れるだろうとおもう。日本人は歴史のせん索となると、文化史上に格別な末しようにまで、骨とう癖的な病的神経を悩ますくせに、現在の事実については案外冷淡のようである。現実が遊戯的空想をいれる余地のない、無興味なものであることにもよるだろうが、田山氏のことに限らず、現在の世界でも古い歴史と同じように、わかっているようでその実何にもわかっていないことが余りに有りすぎるのである。

※本文の表記は、できるかぎり常用漢字・新かな遣いに改めたが、表現上改めていない箇所もある。

※出典 当館所蔵 田山家資料新聞切抜帳より

(記事は「東京朝日新聞」昭和4年7月16日から28日まで連載したもの)